

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第69集

く わ の き
桑 ノ 木 遺 跡

申間警察署郡元職員宿舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第69集

く わ の き
桑 ノ 木 遺 跡

申問警察署郡元職員宿舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター



桑ノ木遺跡近景（南から）

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しましては、日頃より深い御理解をいただき厚くお礼申し上げます。

このたび宮崎県教育委員会では、串間警察署郡元職員宿舎新築工事に伴い、桑ノ木遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

今回の調査では、中世の掘立柱建物跡が検出され、土師器片等が検出されました。今後の串間市の歴史解明の資料の一つになるものと考えます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となれば幸いです。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成15年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 米 良 弘 康

例 言

- 1 本書は、串間警察署郡元職員宿舍新築工事に伴い、宮崎県教育委員会が行った桑ノ木遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は、平成13年11月26日から平成14年2月13日まで行った。
- 4 現地での実測等の記録は、杉田康之、重留康宏が作成した。
- 5 本書に使用した写真は杉田が撮影し、空中写真撮影は九州航空株式会社に委託した。
- 6 テフラ分析は、株式会社古環境研究所に委託した。
- 7 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレース・写真撮影等は杉田が整理作業員の補助を得て担当した。
- 8 本書で使用した「桑ノ木遺跡と周辺の遺跡位置図」は、串間市役所が作成した25,000分の1図「宮崎県串間市全図」、「桑ノ木遺跡発掘調査範囲図」は串間市役所が作成した5,000分の1図「都市計画図」を基に作成した。
- 9 土層断面及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に拠った。
- 10 本書で使用した方位は、座標北（座標第Ⅱ系）及び磁北である。座標北を用いた場合には、G.N.、磁北はM.N.と表示している。レベルは海拔絶対高である。
- 11 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
SB・・・掘立柱建物跡 SC・・・土坑 SH・・・ピット
- 12 本書の執筆及び編集は、杉田が担当した。
- 13 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

| | |
|--------------|----|
| 第I章 はじめに | 1 |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 調査の組織 | 1 |
| 第3節 遺跡の位置と環境 | 2 |
| 第II章 調査の記録 | 4 |
| 第1節 調査の経過 | 4 |
| 第2節 層序 | 5 |
| 第3節 遺構 | 8 |
| 第4節 遺物 | 10 |
| 第III章 まとめ | 14 |

挿図目次

| | |
|--------------------|----|
| 第1図 桑ノ木遺跡と周辺の遺跡位置図 | 3 |
| 第2図 桑ノ木遺跡発掘調査範囲図 | 4 |
| 第3図 土層断面図 | 6 |
| 第4図 火山ガラス比ダイヤグラム | 6 |
| 第5図 遺構分布図 | 7 |
| 第6図 掘立柱建物跡（SB1）実測図 | 8 |
| 第7図 土坑（SC1）実測図 | 9 |
| 第8図 出土遺物実測図（1） | 11 |
| 第9図 出土遺物実測図（2） | 12 |

表目次

| | |
|----------------|----|
| 第1表 土層注記表 | 6 |
| 第2表 火山ガラス比分析結果 | 6 |
| 第3表 テフラ検出分析結果 | 6 |
| 第4表 屈折率測定結果 | 6 |
| 第5表 出土遺物観察表 | 13 |

図版目次

| | |
|---------------------------|----|
| 図版1 桑ノ木遺跡近景、調査区全景 | 15 |
| 図版2 土層断面、遺物出土状況、掘立柱建物跡、土坑 | 16 |
| 図版3 出土遺物 | 17 |

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

串間市大字西方字桑ノ木4043-1に、警察共済組合宮崎支部による鉄筋コンクリート造3階建ての串間警察署郡元職員宿舎の新築工事が計画されたため、県教育庁文化課では平成12年度に、開発事業と埋蔵文化財の取扱いについて協議が必要な箇所であることを宮崎県警察本部会計課に伝えた。そして、平成13年4月に協議を行った結果、試掘調査を実施することになった。試掘調査は平成13年5月10日から11日にかけて実施した。調査の結果、中世の土師器等の遺物、掘立柱建物跡と想定される柱穴が確認できたため、埋蔵文化財の取扱いについて会計課と協議を行い、工事の影響が及ぶ800㎡について発掘調査を実施することになった。

調査は、平成13年11月26日から平成14年2月13日までの間実施した。また、平成14年度には、遺物整理と報告書作成を埋蔵文化財センターで行った。

第 2 節 調査の組織

桑ノ木遺跡の調査組織は次のとおりである。

| | 発掘調査（平成13年度） | 整理報告（平成14年度） |
|--------------|--------------|--------------|
| 宮崎県埋蔵文化財センター | | |
| 所 長 | 矢 野 剛 | 米 良 弘 康 |
| 副所長兼総務課長 | 菊 地 茂 仁 | 大 藪 和 博 |
| 副所長兼調査第二課長 | 岩 永 哲 夫 | 岩 永 哲 夫 |
| 総 務 係 長 | 亀 井 維 子 | 野 邊 文 博 |
| 調査第二課調査第三係長 | 菅 付 和 樹 | 菅 付 和 樹 |
| 同係主査（調査担当） | 杉 田 康 之 | 杉 田 康 之 |
| 調 査 員（調査担当） | 重 留 康 宏 | |

第3節 遺跡の位置と環境

桑ノ木遺跡は、宮崎県串間市大字西方字桑ノ木に所在する。

串間市は、宮崎県の最南端部に位置している。北部はうっそうたる山林に包まれ、東南一帯は太平洋に面している。市内は、南那珂山地と呼ばれる地質である。この山地は、北部にある鱈塚山（1,119m）から南部の都井岬に漸次低下してきており、全体的に南に傾く様相を呈している。その山地に源を發する福島川は、市内最大の福島平野を北から南に貫流し太平洋にそそいでいる。海岸部にはたくさんの出崎がある。良港も多く、中世以来外国貿易の拠点であった崎田港（現在本城漁港）などがある。遺跡の所在する一帯は、市内を走る二つの山脈の間に展開する福島平野の福島川右岸標高約16mの河岸段丘上に立地している。建久8年（1197年）の『日向国図田帳写』によると、すでに鎌倉時代初期には、島津荘の一部である櫛間院として耕地開発されていたところである。

周辺の遺跡について時代別に述べる。縄文時代の遺跡としては、本遺跡より約9km北上した台地上に、竪穴住居跡50軒が検出された三幸ヶ野遺跡がある。大量の縄文時代後期の土器や数多くの磨石・石皿とともに住居跡の多くから炭化した木の実が見つかることなどから、木の実類の採集・加工を主な生業とした生活が想定されている。また、南方約3kmには、福島川の河口南岸の隆起砂丘上に、下弓田式土器の標識遺跡として有名な下弓田遺跡がある。土器とともに石錘が大量に出土し、浮子と思われる軽石製品も見られることから漁労に生業の重点を置いた営みが推察されている。

弥生時代の遺跡としては、本遺跡より西約1.6kmの善田原台地上に8軒の竪穴住居跡とともに弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての土器が出土した唐人町遺跡がある。また、大字北方、標高約27mの小高い丘に所在している大田井遺跡は、壺、高坏、鉢が小範囲内から一括出土しており、出土状況や出土土器の組み合わせなどから祭祀遺跡の可能性も指摘されている。

古墳時代としては、本遺跡付近に点在している福島古墳群がある。昭和8年に地下式横穴1基・円墳15基・前方後円墳3基の計19基が県指定史跡となっているが、現在形状を把握できるのは福島小学校周辺の5基のみとなっている。そのうち、調査区の近辺では、西南に墳長約60mの前方後円墳の剣城塚（福島4号墳）や、西には県内の円墳の中でも6番目の規模をもつ円墳の霧島塚（福島9号墳）が隣接している。

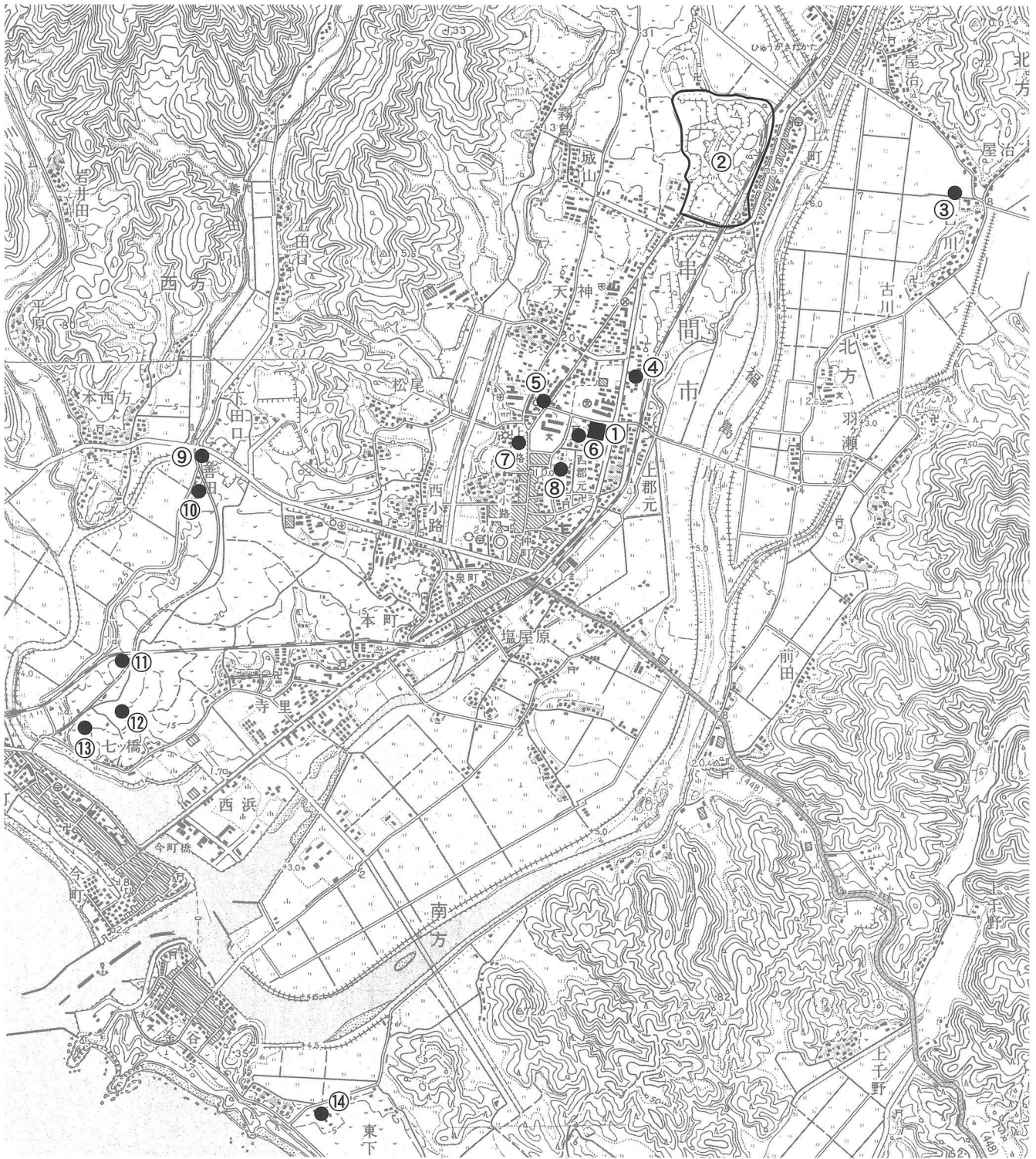
中世の遺跡では、1kmほど北上すると中世城郭である櫛間城跡がある。1335年、野辺盛忠によって築かれた城は、13から14の独立した曲輪で構成される典型的な南九州タイプの広大な中世城で、江戸時代の初期まで櫛間地方の政治・軍事の中心であった。遺物としては、大量の土師器・陶磁器・銭貨・鍛冶関連品・石製品などが出土した。

このように、本遺跡の所在する福島平野一帯は、山塊を背景に、樹枝状に河川が流出する温暖な気候のもと、照葉樹林が繁茂するという恵まれた自然環境を背景とした生活が営まれ、中世からは、地域文化の中心的な役割を果たしてきた歴史的な環境をもつ地域であったと考えられる。

【参考文献】

串間市 1996 『串間市史』

串間市教育委員会 1992 『三幸ヶ野遺跡』 串間市文化財調査報告書 第7集



- | | | | |
|------------------|-----------------|----------|-----------------|
| ①桑ノ木遺跡 | ②櫛間城跡 | ③大田井遺跡 | ④福島5号墳 (毘沙門塚古墳) |
| ⑤福島9号墳 (霧島塚古墳) | ⑥福島4号墳 (剣城塚古墳) | | |
| ⑦福島10号墳 (万多城塚古墳) | ⑧福島3号墳 (長清見塚古墳) | | ⑨銭亀塚古墳 |
| ⑩唐人町遺跡 | ⑪崩先第1号古墳 | ⑫崩先第2号古墳 | ⑬崩先地下式墓 |
| | | | ⑭下弓田遺跡 |

第1図 桑ノ木遺跡と周辺の遺跡位置図 (S = 1/25,000)

第Ⅱ章 調査の記録

第1節 調査の経過

遺跡は、標高約16mの河岸段丘上に位置する。

調査は警察職員宿舎が建設される部分の約800m²を対象にして行った。まず、重機により客土の除去を行った。本調査区の用地買収前は旧営林署跡地であり、ほぼ全域にわたって鬼界アカホヤ火山灰層下の黒褐色土層にまで至る攪乱坑が調査区面積の20%程存在していた。

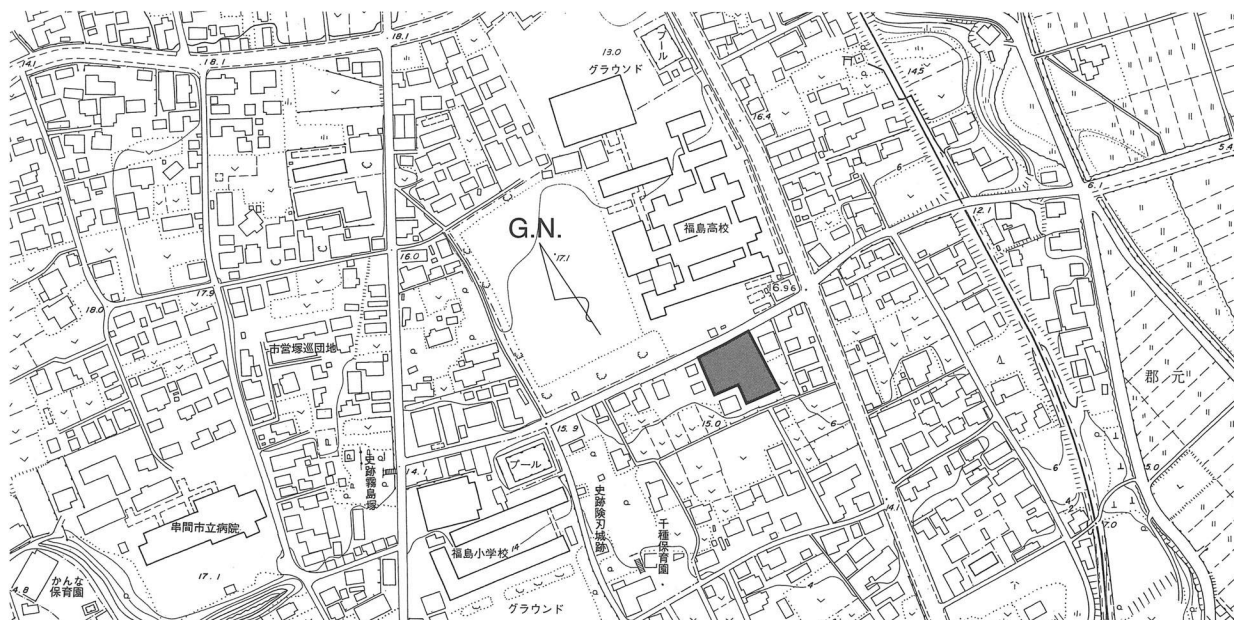
客土の除去後トレンチを数カ所設定して土層の確認を行った。その結果、緩やかに傾斜した地形であること、テフラの堆積状況が一律でないことなどとともに、第Ⅱ層で遺物が出土することが確認された。

そこで調査は、まず第Ⅱ層（黒褐色土）上面で調査区全体を揃える作業から始めた。

第Ⅱ層を人力で剥ぎながら、遺構・遺物の精査を行った。その結果、遺構は検出できなかったが、遺物が中世の土師器片を中心に出土した。これらは、浅い谷地形を形成している南西部に集中していることから、流れ込みではないかと考えられる。続いて、試掘で包含層と考えられていた第Ⅲ層暗褐色土の精査を行った。その結果、上層から土師器15点と弥生土器1点が出土するにとどまった。さらに精査を進めていくと、黒色土下層で調査区全域からピット群が検出され、北西部に掘立柱建物跡1棟が検出された。この埋土には、暗褐色土にボラと鬼界アカホヤ火山灰が少量混入していた。さらに精査を進めていくと、東部に鬼界アカホヤ火山灰層上面から掘り込まれた土坑を検出した。

縄文時代早期から後期旧石器時代の遺構・遺物については、調査区面積の約25%にあたるトレンチを設定して調査した。安全に留意しながら始良・入戸火砕流を含む層まで人力で掘り下げて精査したが、遺物や遺構は検出できず調査を終了した。

現地では記録作成のため、国土座標（XY座標）に乗り、A-1グリッド（-170144.165,22332.547）を設定した後、10mグリッドを設置していった。また、本調査区は排土置き場が狭いため、調査区を二つに分け、反転しながら調査を実施した。



第2図 桑ノ木遺跡発掘調査範囲図（S=1/5,000）

第2節 層序

土層断面図（セクション1）を第3図に示した。

客土は、大量の建築廃材等を含んだ黒褐色土で、特に表面付近はクラッシャーランが敷き詰められていた。この客土を除去した後にトレンチを数カ所設定し、土層の確認を行った。その結果、北東部から南西部に向かって緩やかに傾斜した地形であることや、テフラの堆積状況は一様ではないことが確認された。

第I層は耕作土で、現代の建築廃材等を含んでいた。第II層は、かたくしまる黒褐色土である。上層から中世の土師皿の小片が出土したが、層序や出土状況から流れ込みではないかと考えられる。中・下層では遺物は出土しなかった。また、この層には、暗灰色や暗褐色のスコリア（最大径1.8mm）が含まれており、その特徴や火山ガラスの特徴から10～13世紀に霧島火山から噴出した霧島高原スコリア（Kr-ThS）の可能性が考えられる。第III層は、植物の腐敗土なのか少し赤みがかかる暗褐色土である。土質はそれほどしまらない。第IV層は、しまらずさらさら削れる黒色土である。遺物は、土師器片を中心に17点出土した。この層の中程から、多数のピット等や掘立柱建物跡が検出された。第V層は、軽石を含む層である。この軽石は、重鉱物の組み合わせや、火山ガラス、斜方輝石、角閃石の屈折率などから、約5,500～5,700年前※¹に池田湖火山から噴出した池田湖テフラ（Ik）と考えられる。第VII層の成層したテフラ層は、層相から約6,300年前※¹に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）に同定される。第VIIa層は、黄橙色細粒火山灰層。第VIIb層は、橙色細粒火山灰を含む明黄橙色粗粒火山灰層。第VIIc層は、白色軽石混じり灰白色粗粒火山灰層。そして第VIId層は、黄色軽石混じり火山豆石層（豆石の最大径6mm、軽石の最大径4mm）である。この層は、重鉱物の組み合わせや斜方輝石の屈折率などからK-Ahの噴火に先立つ幸屋火砕流堆積物（K-Ky）に同定される。北西部では鬼界アカホヤ火山灰層が発達しており、その中間層である第VIIc層も厚いが、北東に向かうにつれて鬼界アカホヤ火山灰層はやせていき、第VIIc層も消失していく。第XI層には、約2.4から2.5万年前※¹の始良入戸火砕流堆積物（A-Ito）に由来するテフラ粒子が多く含まれている。しかしながら、斜方輝石の屈折率をみると、桜島火山起源のP13からP11にかけてのテフラが含まれていると考えられる。その中では、約8,000年前※¹のP12に由来する可能性が高いと考えられる。第XII層に含まれる屈折率が高い火山ガラスや多くの斜方輝石は、約1.1万年前に桜島火山付近から噴出した桜島薩摩テフラ（Sz-S）に由来すると考えられる。XVII層は、始良・入戸火砕流である。砂質で径が1～3mmのスコリアを含む。

調査では、このXVII層までトレンチを入れて精査したが、遺物・遺構等は検出できなかった。

※¹：放射性炭素（¹⁴C）年代

【参考文献】

- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究。第四紀研究、11、p.254-269。
新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」、p.138-148。
荒牧重雄（1969）鹿児島県国分地域の地質と火砕流堆積物。地質雑、75、p.425-442。
池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州、始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による¹⁴C年代。第四紀研究、34、p.377-379。

第2表 火山ガラス比分析結果 (セクション1)

| 試料 | bw(c) | bw(pb) | bw(br) | md | pm(sp) | pm(ft) | その他 | 合計 |
|----|-------|--------|--------|----|--------|--------|-----|-----|
| ① | 4 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 243 |
| ② | 3 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 | 1 | 244 |
| ③ | 2 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 245 |
| ④ | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 249 |
| ⑤ | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 248 |
| ⑥ | 1 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 247 |
| ⑦ | 1 | 0 | 0 | 2 | 1 | 1 | 1 | 245 |
| ⑧ | 18 | 2 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 228 |
| ⑨ | 16 | 3 | 1 | 2 | 0 | 1 | 1 | 227 |
| ⑩ | 24 | 4 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 221 |
| ⑪ | 38 | 1 | 0 | 3 | 0 | 1 | 1 | 207 |

数字は粒子数, bw: パブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, cl: 透明, pb: 淡褐色, br: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状

第3表 テフラ検出分析結果 (セクション2)

| 試料 | 軽石・スコリア | | | | 火山ガラス | |
|----|---------|----------|----------|----|-------|--------|
| | 量 | 色調 | 最大径 | 量 | 形態 | 色調 |
| ① | + | 暗灰 暗褐 | 1.2 | ++ | bw>pm | 透明, 淡褐 |
| ② | ++ | 暗灰 暗褐 | 1.8 | ++ | bw>pm | 透明, 淡褐 |
| ③ | + | 暗灰 暗褐, 白 | 1.7, 1.5 | ++ | bw>pm | 透明, 淡褐 |
| ④ | - | - | - | + | bw>pm | 透明 |
| ⑤ | - | - | - | + | bw>pm | 透明 |
| ⑥ | + | 黄白 | 2.0 | + | bw>pm | 透明 |

+++; とくに多い, ++; 多い, +; 中程度, -; 少ない, -; 認められない, 最大径の単位は, mm, bw: パブル型, pm: 軽石型

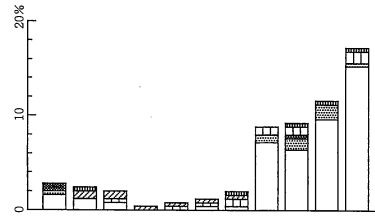
第4表 屈折率測定結果 (セクション1)

| 試料 | 火山ガラス (n) | 重鉱物 | 斜方輝石 (γ) | 角閃石 (n2) |
|----|---|---------|------------------------------|-------------|
| ⑦ | 1.499-1.502 | opx, ho | 1.711-1.715 | 1.670-1.674 |
| ⑧ | 1.509-1.515 | opx>opx | 1.708-1.713 | - |
| ⑩ | 1.498-1.501 | opx>opx | 1.708-1.732 (1.708-1.711) | - |
| ⑪ | 1.498-1.511 (1.498-1.501, 1.508-1.511) | opx>opx | 1.707-1.732 | - |

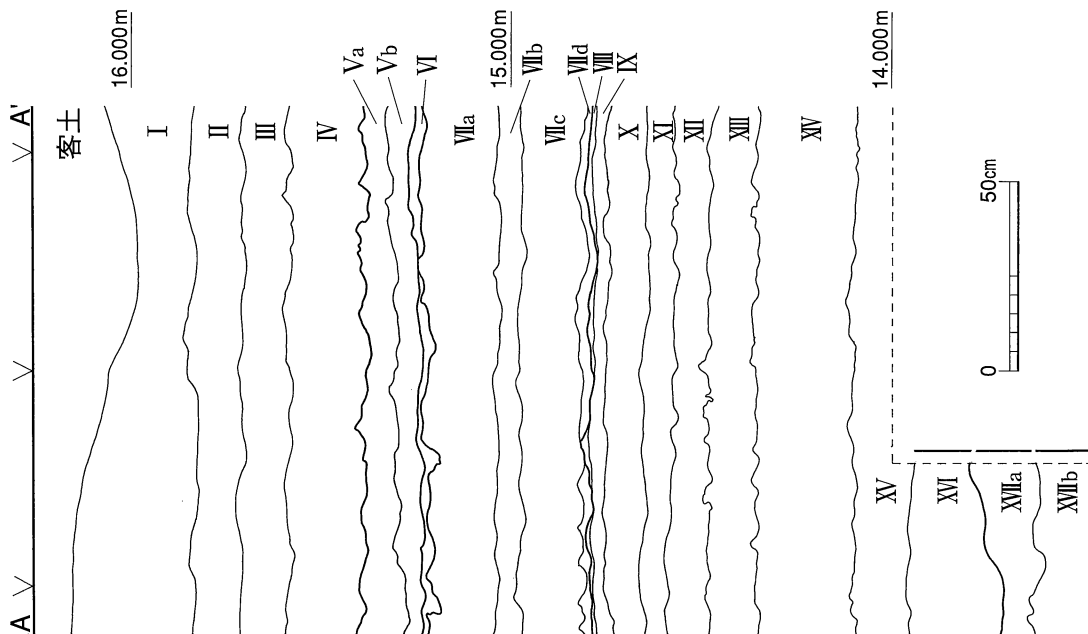
屈折率の測定は, 温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1983) による, 0 は modal rangeを示す, opx: 斜方輝石, opx: 単斜輝石, ho: 角閃石

第1表 土層注記表 (セクション1)

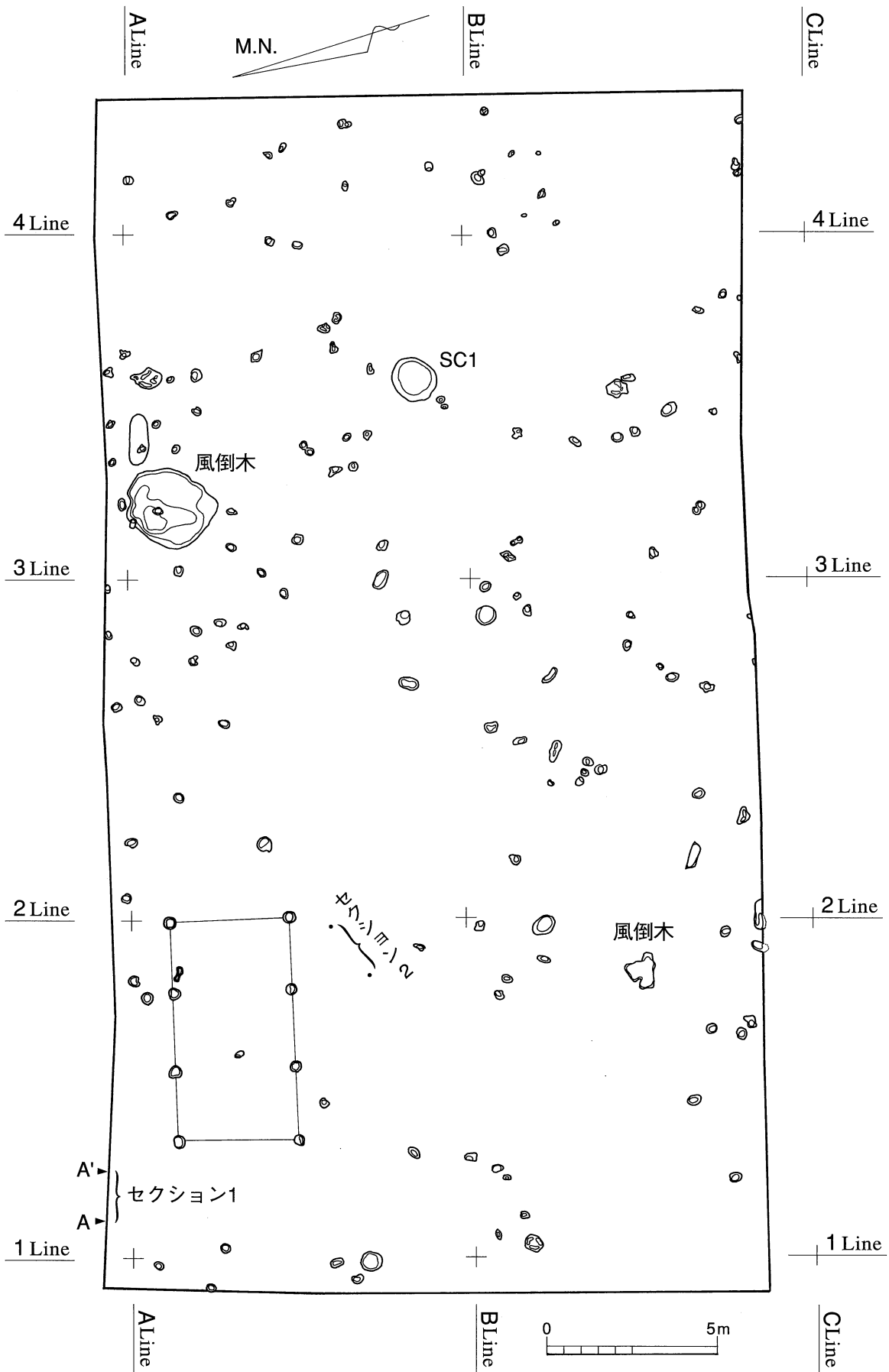
| 層号 | 土色 | 備考 | 資料番号 |
|-------|-------------------|--------------------------------|------|
| I | 黒褐色土 | 田耕作土 (雑草根等を含む) | ①② |
| II | 黒褐色土 hsa 7.5R 3/1 | 硬くしめる, 上面から運物 (中世の土器類) が出土 | ③ |
| III | 暗褐色土 hsa 7.5R 3/3 | それはどしどしな, 運物が6点出土 | ④⑤ |
| IV | 黒色土 hsa 7.5R 2/1 | 粘性があり柔らかい, 下面からピットが検出される | ⑥ |
| Va | 暗褐色土 hsa 7.5R 3/3 | 池田湖テフラ, 直径1~2mmのボラを少量含む | ⑦ |
| Vb | 暗褐色土 hsa 10 R 3/4 | 池田湖テフラ, ボラを70%程度含む | |
| VI | 褐色土 hsa 10 R 4/4 | 通常深く堆積するが浸透せず, 硬くしめる | |
| VIIa | 黄褐色土 hsa 10 R 7/8 | 免野アホヤ火山灰(hs), 硬くしめる | |
| VIIb | 暗褐色土 hsa 10 R 7/6 | 10%層への漸加層, やや砂質でさらさらする | |
| VIII | 灰白色土 hsa 10 R 7/1 | 砂質でさらさらしている, 火山ガラス多くの断片を含む | |
| IX | 明褐色土 hsa 10 R 6/8 | 火山灰石層 (軽石が砂質堆積物, 厚さ約1~6mm) | ⑧ |
| X | 黒褐色土 hsa 10 R 3/2 | VIIa層とIX層の間にくうく堆積する, さらさらした土 | ⑨ |
| XI | 明褐色土 hsa 10 R 6/8 | VIIaに似るが, ハミスの直径が1~2mmとやや小さい | ⑩ |
| XII | 褐色土 hsa 10 R 6/3 | 砂質で手振りしはシラスに似る | ⑪ |
| XIII | 褐色土 hsa 7.5R 4/3 | 硬くしめる | ⑫ |
| XIV | 黒褐色土 hsa 7.5R 3/2 | 非常に硬くしめる | ⑬⑭ |
| XV | 黒褐色土 hsa 7.5R 3/1 | 非常に硬くしめる, 無運物層 | ⑮⑯ |
| XVI | 黒褐色土 hsa 7.5R 6/4 | 球状にテフラが堆積している, プログラ状にくずれる | ⑰ |
| XVII | 黒褐色土 hsa 7.5R 5/3 | 粘性に富み, しまっている | ⑱ |
| XVIII | 褐色土 hsa 7.5R 4/3 | 粘性に富み, しまっている | ⑲ |
| XIX | 黒褐色土 hsa 2.5Y 6/3 | 粘り, 入戸の砂, 漸加層で, 粘性あり | |
| XX | 黒褐色土 hsa 2.5Y 7/6 | 粘り, 入戸の砂, 砂質で, 中位が1~3mmのスコリア含む | |



第4図 火山ガラス比ダイアグラム (セクション1)



第3図 土層断面図 (セクション1) (S=1/20)



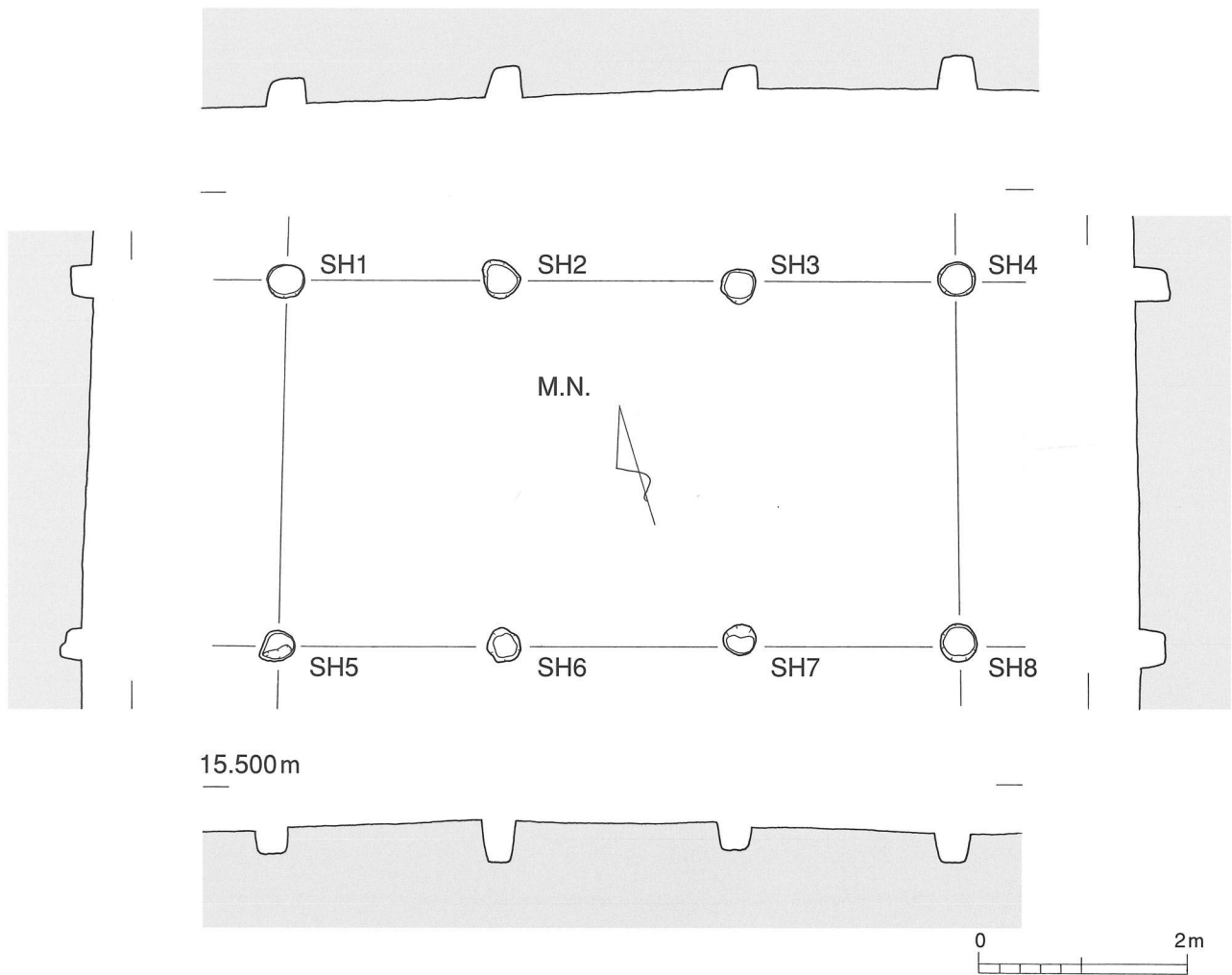
第5図 遺構分布図 (S = 1/170)

第3節 遺構

検出された遺構を、「掘立柱建物跡」「土坑」の順で記述する。なお、掲載した遺物については、第5表「出土遺物観察表」を作成した。遺物の出土地点や特徴等の詳細については参照されたい。

<掘立柱建物跡 (SB1)>

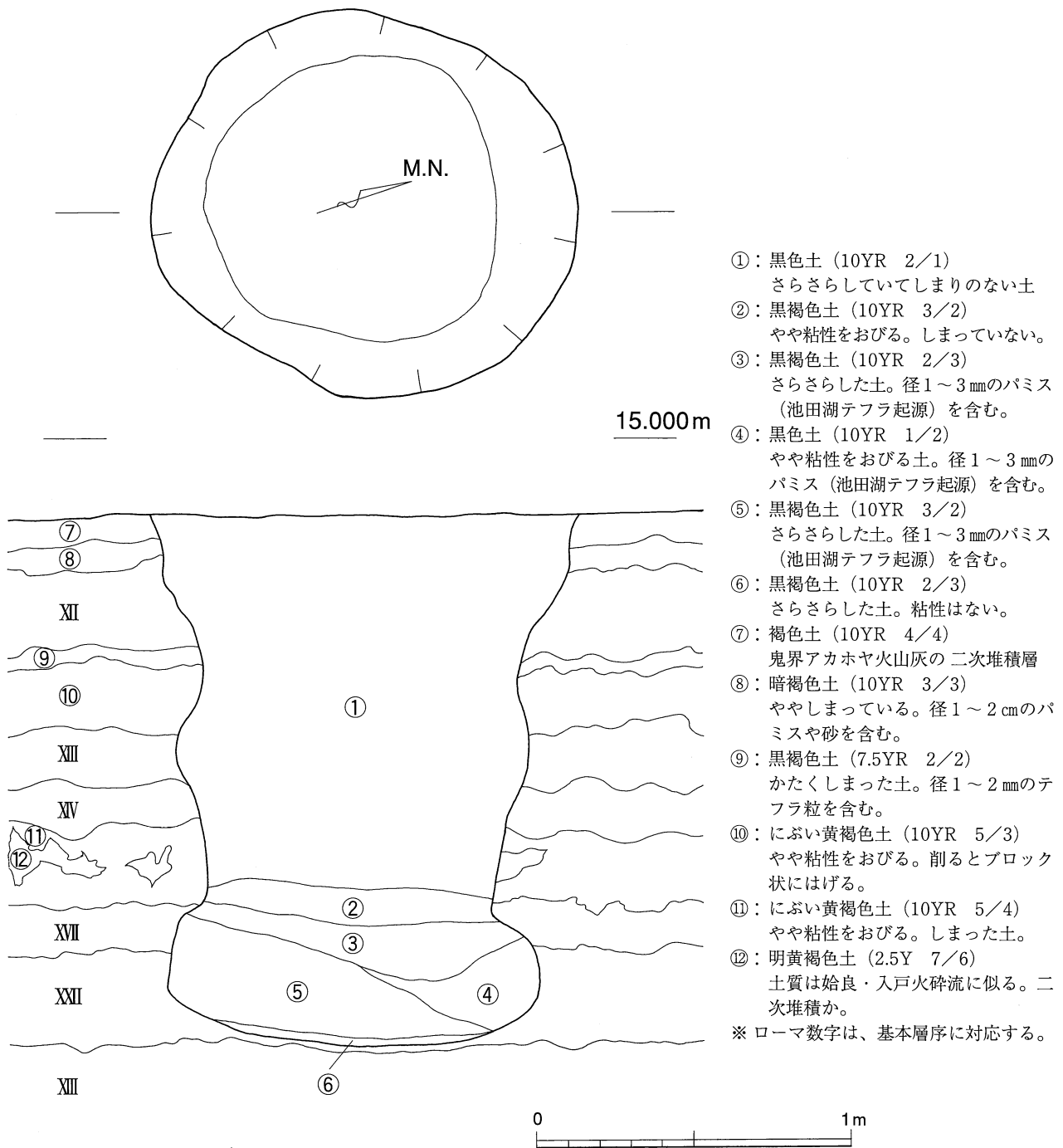
第IV層黒色土下層で梁行3間×桁行1間の掘立柱建物跡1棟が検出された。この建物跡の規模は、実長6.8m×3.8m、床面積約26m²を測り、棟方位は、N72°Wの東西棟である。最大の柱穴はSH8で長径38cm、短径34cm。最小のものはSH5で長径30cm、短径28cmである。また、最深のものはSH6で46cm、最浅のものはSH7で21.8cmであった。いずれも円形に掘り込まれており、柱根、柱痕は確認できなかった。埋土は、中に径が1～10mmの塊状アカホヤを1～5%程度、径1～2mmの小粒状ボラを1%以下の割合で含む暗褐色土である。遺物等は出土せず、根石についても確認できなかった。火所に伴う炭や焼土は出土せず、溝状遺構や付属土壌等、付属する施設などは確認できなかった。遺構の上面から風化が進んでいるものの中世の土師皿が出土したこと、また、埋土は中世の土師皿が出土した第III層土であることから中世につくられたものと考えられる。



第6図 掘立柱建物跡 (SB1) 実測図 (S = 1/70)

<土坑 (SC1) >

調査区の西部の第IV層上面で1基の土坑が検出された。平面プランは検出面で楕円形をとりながら下部に向かって径を細めていき、最深部では円形となる。規模は長径142cm、短径116cm。検出面からの深さ168cmを測る。検出面から20cmと80cm部分に20~30cm幅の窪みがまわっていることが確認された。さらに、底部は袋状に広がっており、ほぼ平らである。土坑に付随する遺構や遺物等は出土せず、時期を特定するには至らなかった。



- ①：黒色土 (10YR 2/1)
さらさらしてしまりのない土
 - ②：黒褐色土 (10YR 3/2)
やや粘性をおびる。しまっていない。
 - ③：黒褐色土 (10YR 2/3)
さらさらした土。径1~3mmのパミス
(池田湖テフラ起源)を含む。
 - ④：黒色土 (10YR 1/2)
やや粘性をおびる土。径1~3mmの
パミス (池田湖テフラ起源)を含む。
 - ⑤：黒褐色土 (10YR 3/2)
さらさらした土。径1~3mmのパミス
(池田湖テフラ起源)を含む。
 - ⑥：黒褐色土 (10YR 2/3)
さらさらした土。粘性はない。
 - ⑦：褐色土 (10YR 4/4)
鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層
 - ⑧：暗褐色土 (10YR 3/3)
ややしまっている。径1~2cmのパ
ミスや砂を含む。
 - ⑨：黒褐色土 (7.5YR 2/2)
かたくしまった土。径1~2mmのテ
フラ粒を含む。
 - ⑩：にぶい黄褐色土 (10YR 5/3)
やや粘性をおびる。削るとブロック
状にはげる。
 - ⑪：にぶい黄褐色土 (10YR 5/4)
やや粘性をおびる。しまった土。
 - ⑫：明黄褐色土 (2.5Y 7/6)
土質は始良・入戸火砕流に似る。二
次堆積か。
- ※ ローマ数字は、基本層序に対応する。

第7図 土坑 (SC1) 実測図 (S=1/20)

第4節 遺物

基本層序の第Ⅱ層及び第Ⅲ層より約1,000点程の土器・陶磁器が出土した。土器・陶磁器いずれとも小片が多く、特に土器は風化しているものが多かった。

1 縄文土器 (第8図1)

1は口縁部が内湾し、口縁部の外側やや下方に刻目突帯を有する深鉢である。刻目の間隔は18mmを測る。口唇部は肥厚してやや丸みをおび、面取りされている。器面調整は外面に丁寧なナデ、内面にナデを施している。また、口唇部分にススが付着している。

2 弥生土器 (第8図2)

2は口縁部が内傾し、口縁部の外側下方に刻目突帯を2条有する深鉢である。突帯の間隔は17mmを測る。内外面とも黒変しているが、内面では口唇部付近、外面では突帯間に黒変はみられなかった。土器製作後の変化と思われる。

3 須恵器 (第8図3～4)

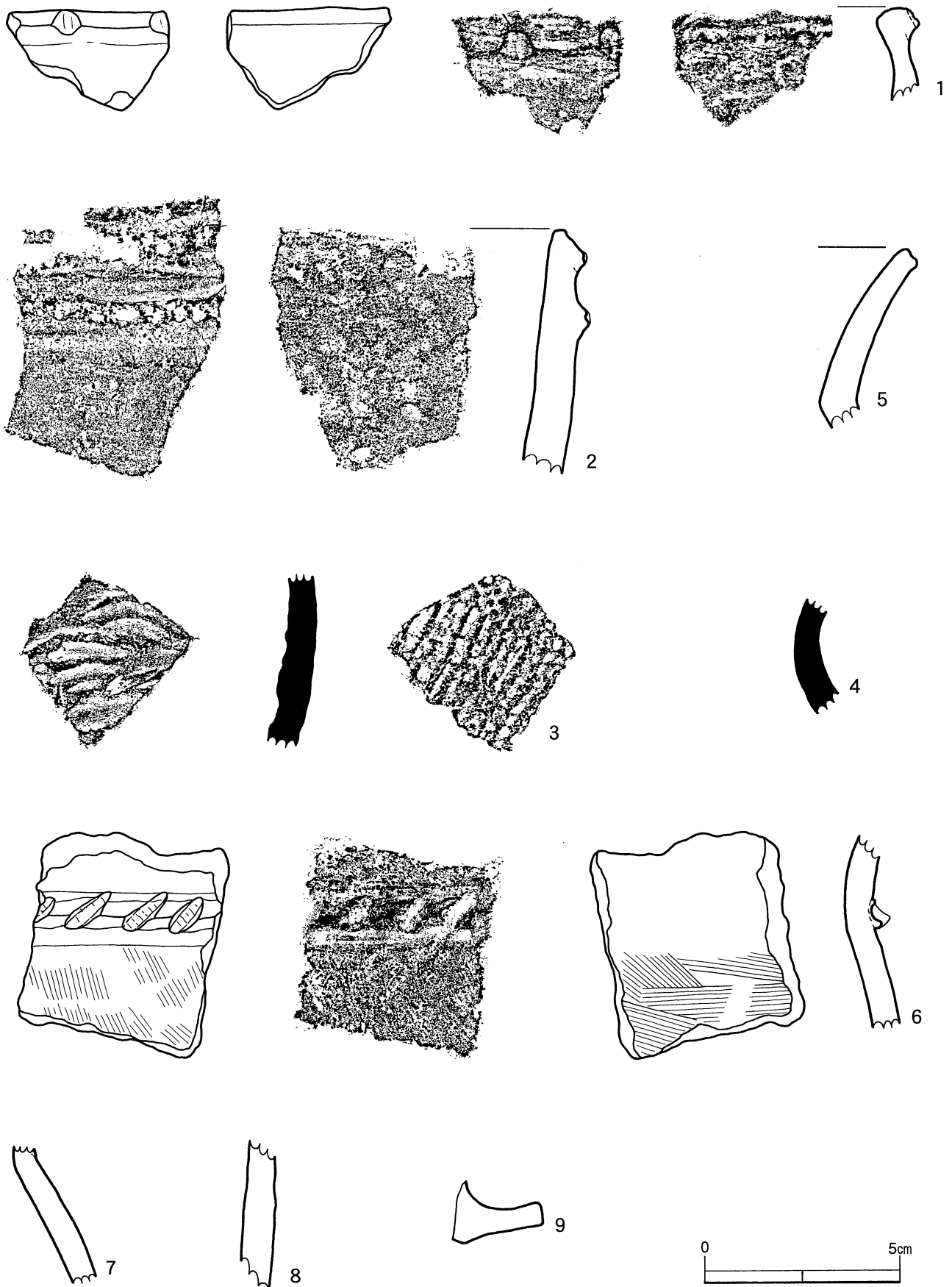
3は甕の胴部である。内面は同心円当て具痕、外面が格子目タタキである。4は甕の頸部である。内外面ともに丁寧なナデで、外面には自然釉が見られる。

4 土師器 (第8図5～9・第9図10～20)

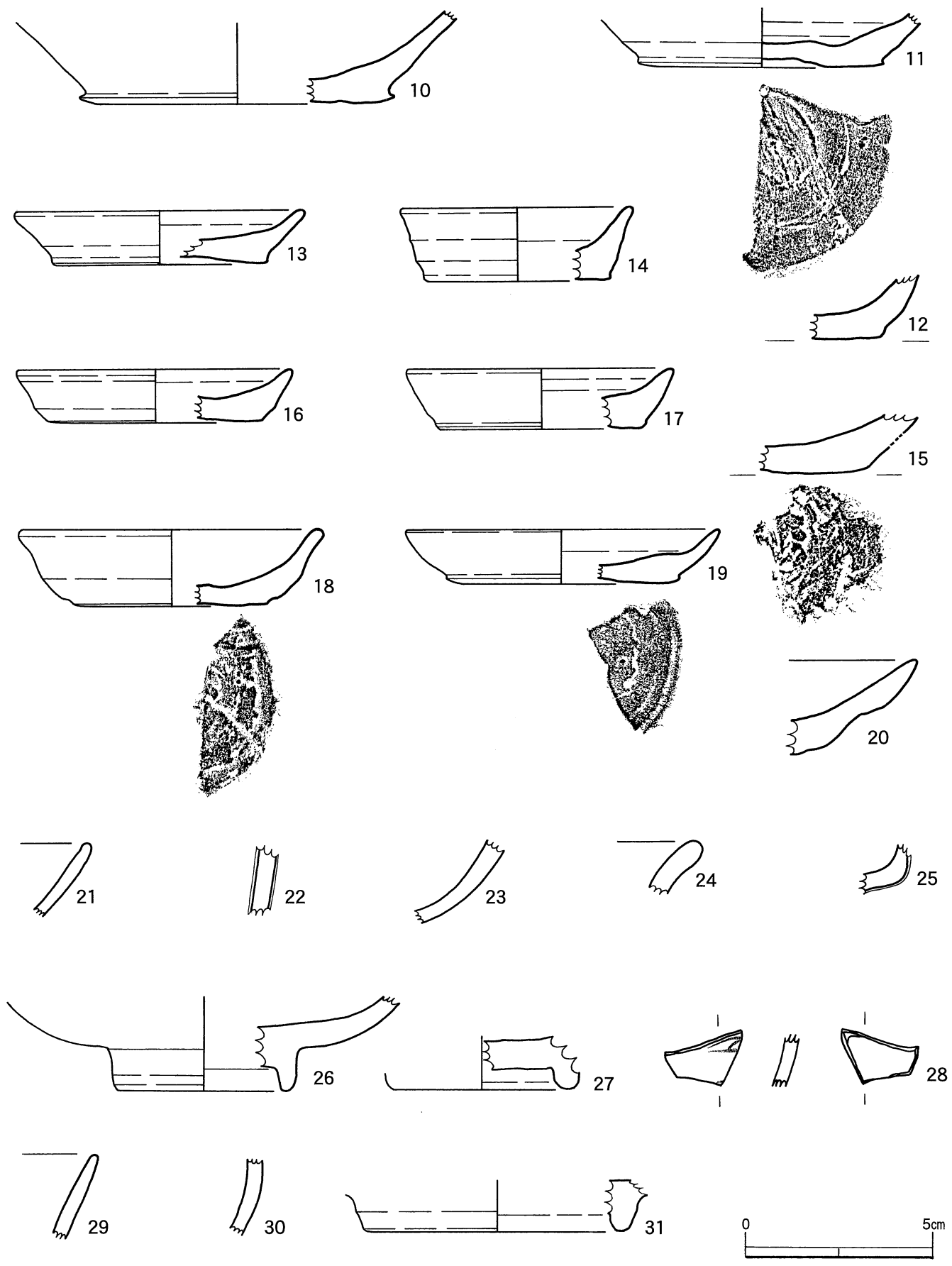
5は口縁部が緩やかに外反する甕で、口唇部は面取りされている。頸部で屈曲しており、内外面ともに明瞭な稜線が残存する。器面調整は内外面とも丁寧なナデである。内外面とも黒変がみられるが内面にその傾向が強い。6は頸部に貼付刻目突帯をもつ甕である。頸部を中心に「く」字形に緩やかに外反する。口縁部は断面形が舌状に尖る形状を呈する。内面全体に炭化物が付着している。7は甕の頸部、8は甕の胴部である。いずれも弥生土器と考えられるが、小片で断定できない。9は土師質土器の羽釜鏝で、外面全体にススが付着しているが鏝下部にその傾向が強い。10～12は坏、13～20は皿で、本遺跡で最も多く出土した遺物の一部である。底部の切り離しはいずれもヘラ切りである。10～11は底部からの立ち上がりが直線的で、12はやや内湾する。13～15は底部からの立ち上がりが直線的で、13～14は口縁端部が丸い。16～19は底部からの立ち上がりやや内湾し、18は先端でわずかに外反する。

5 陶磁器 (第9図21～31)

21～27は龍泉窯系青磁である。24は皿の口縁部で、貫入が見られる。25は内面に釉がかかっておらず、その形状から袋物ではないかと考える。それ以外は碗である。26～27は高台内面が無釉である。26は畳付が無釉で、27は畳付を越えて高台内面途中まで釉がかかり、見込みは蛇の目釉剥ぎである。28は芭蕉葉文と波濤文帯をもつ景德鎮の皿か。29～30は薩摩系陶器か。29は碗で、口縁は直線的にのびる。30は内外面の施釉の状況と形状から土瓶と考える。31は全面に施釉後、畳付の釉を剥いでいる。



第8图 出土遺物実測図 (1)



第9図 出土遺物実測図 (2)

第5表 出土遺物観察表

| 遺物番号 | 種別 | 器種部位 | 出土地点 | 法量 (cm) | | | 手法・調整・文様ほか | | 色調 | | 胎土の特徴 | 備考 |
|------|-------|----------|------|---------|-------|-----|-------------------------|-----------------------------|--------------------------------|------------------------------------|--|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 縄土器 | 深鉢口縁部 | Ⅱ層 | | | | 刻目突帯、横方向のナデ、スス付着 | ナデ、スス付着 | 浅黄 (2.5YR 7/3) | 浅黄 (2.5YR 7/3) | 1mm以下の無色透明光沢粒を含む。 | |
| 2 | 弥生土器 | 深鉢口縁部 | Ⅲ層 | | | | 刻目突帯、横方向のナデ、黒変 | 横方向のナデ、黒変 | にぶい赤褐 (5YR 4/3) | 赤褐 (5YR 4/6) 暗灰黄 (2.5Y 4/2) | 2mm~5.5mmの黄褐色岩片を少量、2mm以下の白色光沢のある粒、1mm以下の黒色光沢のある粒及び黒色の粒を含む。 | |
| 3 | 須恵器 | 甕胴部 | Ⅱ層 | | | | 格子目タタキ | 同心円当て具痕 | 灰白 (10Y 7/1) | 灰白 (5Y 5/1) | 精良 | |
| 4 | 須恵器 | 甕頸部 | Ⅱ層 | | | | 横方向のナデ、自然釉 | 横方向のナデ | 暗灰 (N 3/) | 灰:上部 (N 5/) 灰:下部 (N 4/) | 精良 | |
| 5 | 土師器 | 甕口縁部 | Ⅱ層 | | | | 頸部に向かって縦方向のハケ目の後、横方向のナデ | 横方向のナデ、黒変 | にぶい黄橙 (10YR 7/4) | にぶい黄橙 (10YR 7/4) 黄灰 (2.5YR 6/1) | 微細~2mm程の無色透明、褐色、黒の光沢のある粒と1mm~2.5mmの灰色、褐灰、鈍い赤褐色、黒色粒を含む。 | |
| 6 | 土師器 | 甕頸部 | Ⅱ層 | | | | 貼付刻目突帯、横方向のナデ、斜方向のハケ目 | 斜方向のハケ目の後、横方向のナデ、内面全体に炭化物付着 | 浅黄橙 (10YR 8/4) | 浅黄橙 (10YR 8/4) | 2.5mm以下の灰色、茶色、無色透明光沢粒、黒色柱状光沢粒を含む。 | |
| 7 | 土師器 | 甕頸部 | Ⅲ層 | | | | 横方向のナデ | 横方向のナデ後、斜方向のナデ | 明赤褐 (5Y 5/6) | にぶい褐 (7.5YR 5/3) | 3mm以下で赤褐色、褐色、灰褐色の粒、1.5mm以下で白色光沢のある粒を含む。 | |
| 8 | 土師器 | 甕胴部 | Ⅱ層 | | | | 斜方向のハケ目 | 横方向のハケ目の後、縦方向のナデ、黒変 | にぶい黄橙 (10YR 6/4) | にぶい黄橙 (10YR 6/4) | 2mm以下の無色透明光沢粒、灰色・茶色の粒を多く含む。 | |
| 9 | 土師質土器 | 羽釜鏝 | Ⅱ層 | | | | 横方向のナデ、スス付着 | | にぶい黄橙 (10YR 7/4) | にぶい黄橙 (10YR 7/4) | 2mm以下の白色の粒、4mm以下の灰色の粒を含む。 | |
| 10 | 土師器 | 坏胴部~底部 | Ⅱ層 | | (8.8) | | 回転ナデ | 回転ナデ | 浅黄橙 (7.5YR 8/4) | にぶい黄橙 (10YR 7/4) | 微細~2mmの橙色の粒を多く含む。 | ヘラ切り |
| 11 | 土師器 | 坏胴部~底部 | Ⅱ層 | | (6.8) | | 回転ナデ | 回転ナデ | にぶい橙 (7.5YR 7/4) | にぶい橙 (7.5YR 7/4) | 微細~1mmの褐灰、赤褐の粒を含む。 | ヘラ切り |
| 12 | 土師器 | 坏胴部~底部 | Ⅱ層 | | | | 回転ナデ、黒変 | 回転ナデ、黒変 | 浅黄橙 (7.5YR 8/4) | 浅黄橙 (7.5YR 8/4) | 1mm以下の茶色の粒、微細な無色透明光沢粒、黒色光沢粒を含む。 | ヘラ切り |
| 13 | 土師器 | 皿口縁~底部 | Ⅱ層 | (8.1) | (6.0) | 1.5 | 回転ナデ | 回転ナデ、底部が黒変 | にぶい橙 (7.5YR 6/4) | にぶい橙 (7.5YR 7/4) | 微細~0.5mmの橙、灰褐と無色透明の光沢のある粒を含む。2mmの灰褐の粒を少し含む。 | ヘラ切り |
| 14 | 土師器 | 皿口縁~底部 | Ⅱ層 | | | 2.1 | 回転ナデ | 回転ナデ | にぶい橙 (7.5YR 7/4) | にぶい橙 (7.5YR 7/4) | 微細な黒色や灰白の粒、無色透明の光沢のある粒と微細~1.5mmの赤褐の粒を含む。 | ヘラ切り |
| 15 | 土師器 | 皿胴部~底部 | Ⅱ層 | | | | 回転ナデ | 回転ナデ | 橙 (7.5YR 7/6) | 橙 (7.5YR 7/6) | 1mm以下の茶色の粒を含む。 | ヘラ切り |
| 16 | 土師器 | 皿口縁~底部 | Ⅱ層 | (7.7) | (6.0) | 1.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | にぶい黄橙 (7.5YR 7/3) | にぶい黄橙 (7.5YR 7/4) | 微細~1mmの橙と褐灰色の粒を含む。 | ヘラ切り |
| 17 | 土師器 | 皿口縁~底部 | Ⅱ層 | | | 1.7 | 回転ナデ | 回転ナデ | 浅黄橙 (10YR 8/3) | 浅黄橙 (10YR 8/4) | 微細な黒、褐灰の粒を含む。 | ヘラ切り |
| 18 | 土師器 | 皿口縁~底部 | Ⅱ層 | (8.2) | (5.5) | 2.2 | 回転ナデ | 回転ナデ | にぶい橙 (7.5YR 7/4) | にぶい橙 (7.5YR 7/4) | 2mm以下の茶色、黒色の粒、微細な無色透明光沢粒を含む。 | ヘラ切り |
| 19 | 土師器 | 皿口縁~底部 | Ⅱ層 | (8.7) | (5.9) | 1.5 | 回転ナデ | 回転ナデ、底部端が黒変 | 浅黄橙 (7.5YR 8/4) | 浅黄橙 (10YR 8/4) | 1mm以下の茶色の粒、微細な無色透明光沢粒を含む。 | ヘラ切り |
| 20 | 土師器 | 皿口縁~底部付近 | Ⅱ層 | | | | 回転ナデ | 回転ナデ | 浅黄橙 (10YR 8/4) | 浅黄橙 (10YR 8/4) | 1mm以下の茶色の粒、微細な無色透明光沢粒を含む。 | |
| 21 | 青磁 | 碗口縁部 | Ⅲ層 | | | | 施釉、貫入 | 施釉、貫入 | 黄褐 (2.5Y 5/3) | 黄褐 (2.5Y 5/3) | 精良、胎土調は灰黄 (2.5Y 6/2) | |
| 22 | 青磁 | 碗体部 | Ⅱ層 | | | | 施釉 | 施釉 | オリーブ灰 (10YR 5/2) | オリーブ灰 (10YR 5/2) | 精良、胎土調は灰 (10Y 6/1) | |
| 23 | 青磁 | 碗体部 | Ⅱ層 | | | | 施釉、貫入 | 施釉、貫入 | オリーブ褐 (2.5GY 6/1) | オリーブ褐 (2.5GY 6/1) | 精良、胎土調は灰白 (5Y 7/1) | |
| 24 | 青磁 | 皿口縁部 | Ⅲ層 | | | | 施釉、貫入 | 施釉、貫入 | オリーブ灰 (10Y 6/2) | オリーブ灰 (10Y 6/2) | 精良、胎土調は灰白 (10Y 8/1) | |
| 25 | 青磁 | 袋体部 | Ⅲ層 | | | | 横方向のナデ | 施釉、貫入 | オリーブ灰 (10Y 6/2) 浅黄 (5Y 7/3) | 灰 (5Y 6/1) | 精良、胎土調は灰 (5Y 6/1) | |
| 26 | 青磁 | 碗体部~底部 | Ⅲ層 | | (4.8) | | 横方向のナデ、施釉、貫入、高台内露胎 | 施釉、貫入 | 明緑灰 (7.5GY 7/1) | 明緑灰 (7.5GY 7/1) | 精良、胎土調は灰白 (10Y 7/1) | |
| 27 | 青磁 | 碗底部 | Ⅲ層 | | (4.9) | | 施釉、砂付着、高台内露胎 | 施釉、貫入、見込み蛇の目釉剥ぎ | 明緑灰 (7.5GY 7/1) | 明緑灰 (7.5GY 7/1) | 精良、胎土調は灰白 (10Y 7/1) | |
| 28 | 染付 | 皿体部 | Ⅲ層 | | | | 施釉 | 施釉 | 明緑灰 (7.5GY 7/1) | 明緑灰 (7.5YG 7/1) | 精良、胎土調は灰白 (7.5Y 8/1) | |
| 29 | 陶器 | 碗口縁~体部 | Ⅱ層 | | | | 回転ナデ、施釉 | 回転ナデ、施釉 | 黄褐 (10YR 5/6) | 黄褐 (10YR 5/6) 暗褐 (7.5YR 3/4) | 精良、胎土調はにぶい褐 (7.5Y 6/4) | |
| 30 | 陶器 | 土瓶体部 | Ⅱ層 | | | | 回転ナデ、施釉、貫入 | 回転ナデ、施釉 | オリーブ褐 (2.5Y 4/3) | 褐 (7.5YR 4/3) | 精良、胎土調はにぶい褐 (7.5YR 6/3) | |
| 31 | 陶器 | 碗底部 | Ⅱ層 | | (7.1) | 1.4 | 施釉、畳付釉剥ぎ | 施釉 | 黄橙 (2.5Y 5/3) | にぶい橙 (7.5YR 7/3) | 精良、胎土調はにぶい橙 (7.5YR 7/3) | |

第Ⅲ章 まとめ

桑ノ木遺跡の所在する福島平野では、縄文時代から中世にかけての遺跡がたくさん確認されている。また、本調査区と国道を隔てた同地区内で、1998年に申間市教育委員会による試掘が行われ、弥生時代から平安時代にかけての土器が出土している。

本遺跡の発掘調査では、主に中世の遺物が出土した。ここでは、検出した遺構・遺物についてまとめたい。

<遺 構>

本遺跡では、掘立柱建物跡1棟と土坑1基が検出された。掘立柱建物跡は、風化が進んでいるものの中世のものと判断できる土師皿が遺構上面から出土したこと、また、柱穴の埋土は中世の土師器が出土した第Ⅲ層暗褐色土であることから、中世に構築されたものと考えられる。土坑は、掘り込みの様子から人的に掘り込まれたものである。遺物等が出土せず時期を特定するには至らなかったが、規模の大きさや3重に窪みがまわる形状は独特である。今後の類例を待ちたい。

<出土遺物>

縄文土器と弥生土器が少数出土した。いずれも小片で土器型式は特定できないが、弥生土器は宮崎市右葛ヶ迫遺跡で類似したものが出土している。

本遺跡では、中世の土師器片が最も多く出土した。また、13～15世紀と考えられる龍泉窯系の青磁が5点、15～16世紀と考えられる景德鎮窯の染付が1点、薩摩系陶器が2点出土した。遺跡の北には中世城郭である櫛間城があり、城郭内からは本遺跡で出土した陶磁器と同系列のものが多数出土している。土師器についても同様である。これらの遺物は遺構に伴うものではなく、双方の遺物の関連について詳細な検討をすることなしに短絡的に結びつけることはできないが、城郭と港を結ぶ中間地点という立地条件は、本遺跡との関連をうかがわせる。

【参考文献】

- 申間市教育委員会 1998 『市内遺跡発掘調査報告書』申間市文化財調査報告書 第17集
日本貿易陶磁研究会 1998 『貿易陶磁研究』No.1～No.5
中世土器研究会 1997 『概説 中世の土器・陶磁器』
宮崎県教育委員会 2000 『右葛ヶ迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第21集
2002 『本城跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第60集
宮崎県考古学会 1994 『宮崎考古 第13号』宮崎県南部における中世城郭の一例



桑ノ木遺跡近景（東から）



桑ノ木遺跡調査区全景：モザイク合成（垂直）



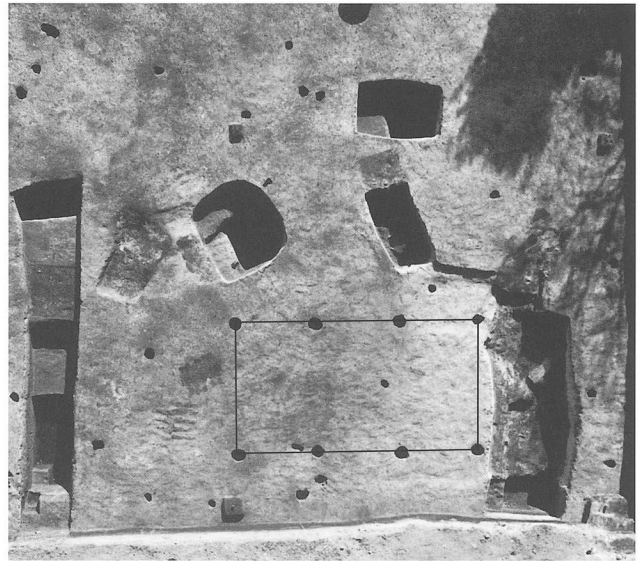
土層断面



遺物出土状況（第Ⅱ層）



掘立柱建物跡（検出状況）



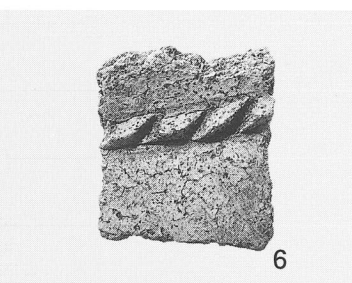
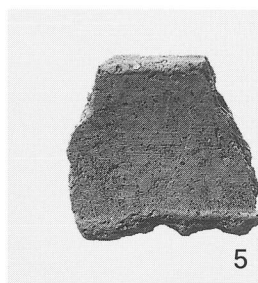
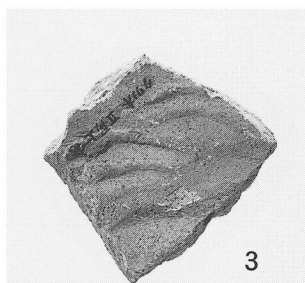
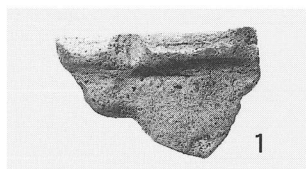
掘立柱建物跡（完掘状況）



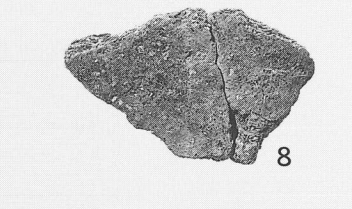
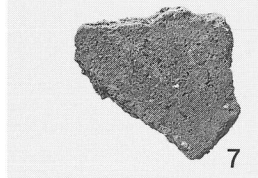
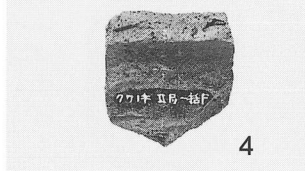
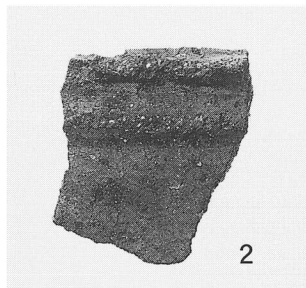
土坑（完掘状況）



土坑（断面：東から）



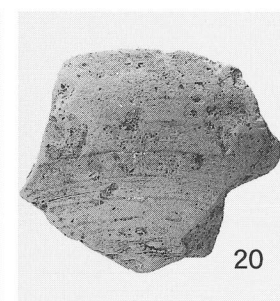
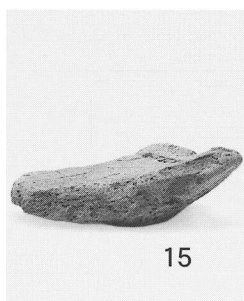
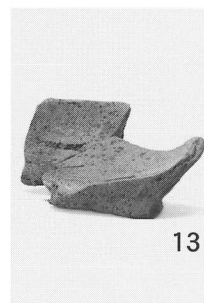
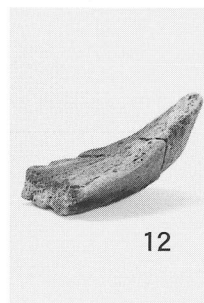
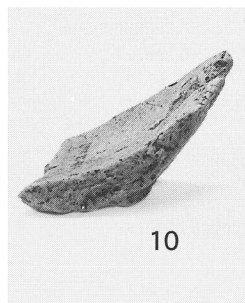
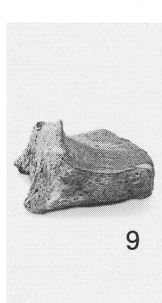
縄文時代晩期土器



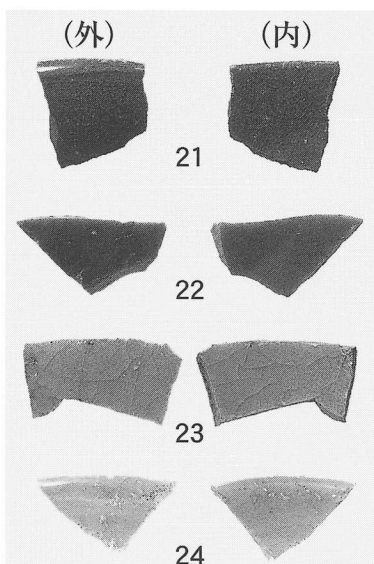
弥生土器

須恵器

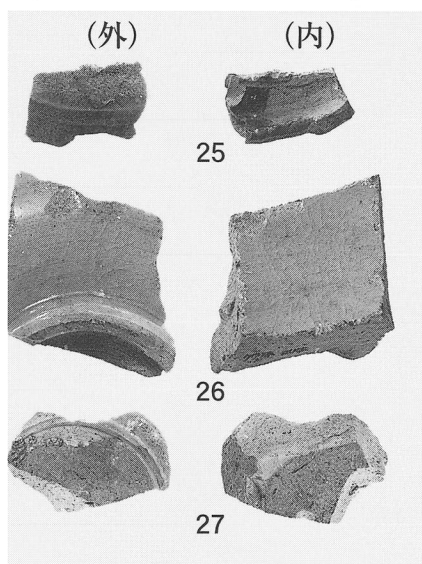
土師器



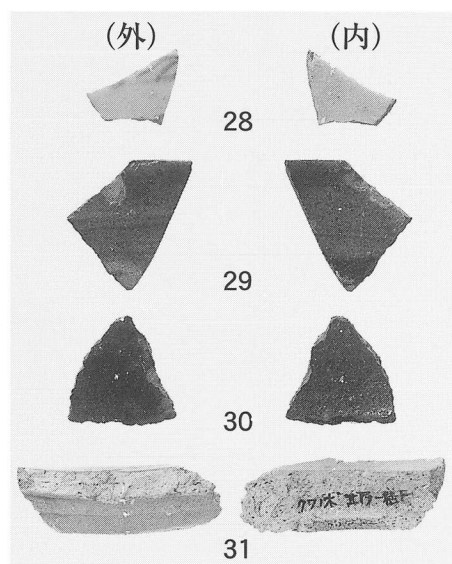
土師器 (9:羽釜、10~12:坏、13~20:碗)



龍泉窯糸青磁



龍泉窯糸青磁



その他の陶磁器

報告書抄録

| ふりがな | くわのきいせき | | | | | | | |
|------------------|---|-------|--------|-------------------------|--------------------------|-------------------------------|-------------------|--|
| 書名 | 桑ノ木遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | 申間警察署郡元職員宿舍新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第69集 | | | | | | | |
| 編集機関 | 宮崎県埋蔵文化財センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒880-0212 宮崎県佐土原町大字下那珂4019番地 | | | | | | | |
| 編著者名 | 杉田康之 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2003年2月28日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| くわのきいせき 桑ノ木遺跡 | みやざきけんくしまし 宮崎県申間市 おおあざにしかたあざくわ 大字西方字桑 のき ノ木 4043-1 | 45207 | | 31度 27分 54秒 付近 | 131度 14分 07秒 付近 | 2001.11.26 ～ 2002. 2.13 | 800m ² | 申間警察署 郡元職員宿 舎新築工事 に伴う事前 調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 桑ノ木遺跡 | 散布地 | 中世 | 掘立柱建物跡 | 土師器、陶磁器 | | | | |

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第69集

桑ノ木遺跡

串間警察署郡元職員宿舍新築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 2003年2月28日

編集発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印刷 田中印刷株式会社
〒880-0022 宮崎市大橋3丁目110番地
TEL 0985-28-4724 FAX 0985-20-9285
